

(二〇一四年度)

## 4 国 語 問 題 (六〇分)

(この問題冊子は22ページ、三問である。)

### 受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、監督から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 五、解答は解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいいいに消すこと。消しきれずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破つたりしてはならない。
- 九、試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

1 身体以外に真実などというものはない。というのが大袈裟<sup>おおげさ</sup>だとしたら、少なくとも、どんな真実もそれが身体において言わば受肉され、経験され、生きられなければ、真実だということにはならない。ひとの心のもつとも奥深いところ、ひとの生のもつとも根底、そういったものにかかわらないようなものは、それがどれほど正しい命題であろうとも、真実という名には値しない。事実を事実として述べたからと言って真実ではないのであって、事実を超えてしまい、しかもその超出が身体において、（それ以外ではありえない）という感動的な確実さとともに生きられてはじめて、われわれはいくぶんか真実とはどのようなことなのか識<sup>し</sup>ったことになるのだ。

だが、そうなると、はじめに述べたように、結局、どんな真実も、ただ身体<sup>2</sup>というこのいかにも明らかで、しかしわけのわからない不思議な存在のヴァリエーションではないか、という疑いも兆してくる。死、性、労働、霊……そういったすべての真実は、結局は、身体というわれわれの唯一の真実のただか「系」にすぎないのであって、だが、まさにそんな個別的な「系」としてしかそれが見えてこないことこそが、身体という大真実の所以なのだと考えるべきなのかもしれない。

身体は大真実だ。だが、この真実が厄介なのは、われわれの誰もが——生きてこの世界にある限り——その身体として存在していることだ。そして、それ故に、ほかのものならばともかく、われわれは自分<sup>3</sup>であるところのこの真実だけは、なかなか真実として受け止められないことになる。われわれはすでにそれである。われわれ自身がすでにそれであるところのものが、なんで真実などと言われよう。われわれはすでにそれなのだから、それが何なのか、これ以上ないくらいよく分かっているはずだ。だが、それが、そうか？

むしろわれわれがすでにそれであるからこそ、われわれはけっしてそれが見えない、分からないと言うべきではないか。われわれの能力の問題ではない。知力の問題ではない。そうではなくて、構造的に、われわれはわれわれの身体がどんな真実なのか分からないという根源的盲目によって貫かれている。われわれがそれであるという存在様態が、その存在の真実を隠蔽<sup>いんぺい</sup>し

てしまっているのだ。

あるいは、別の言い方をすれば、われわれは、われわれが身体であり、それでしかないということ容易に認めはしない。急に歯が痛くなったり、老いて白髪が増えたり、腰が曲がったりしても、だからといって「わたし」というものが取り返しつかない仕方に変化したとはふつうひとは考えない。わたしはたしかに身体を持ち、身体によって規定されてはいるが、しかしだからといって「わたし」は身体そのものとは違うと了解しているのである。「わたし」は自由である。身体の拘束を超えて、もつともっと自由である。わたしが身体であるのではなく、わたしはわたしの身体を持っている。存在ではなく、所有。というふうに転倒が起こるのだ。「to」動詞が「have」動詞に移行する。そして、そこから、——大袈裟に言えば——人間の文化の根底をなす一切の所有・私有の問題が到来するのだ。

われわれは身体である(存在)にもかかわらず、しかしその真実に眼をつぶり、それを転倒させて、われわれが身体を所有していると思ひ込む。身体を所有し続けなければならないと思ひ込むのだ。そして、われわれはみずからの身体の延長にさまざまなモノを所有しようとし、さらには他者の身体までもあたかも自分のモノであるかのように所有しようとする。そこに幻想が生じ、文化が生まれる。存在の転倒から文化という幻想が生まれてくるのだ。この点については、フロイトが発見した無意識の論理の機構が「去勢」という幻想の出来事にかかっていたのが興味深い。あそこでも、男であるか女であるかという存在の論理は、全体と部分とのあいだの非対称的な転倒を経て、ある小さな器官を持つか持たないかという所有の論理に転換させられてしまっていた。存在が所有へと転倒されて、そこに幻想が生まれるのであり、われわれは言わばみずからの存在の真実を見ないようにするため、あるいは見えないからこそ、それを幻想にかえてとりあえず了解しようとするのである。

われわれが身体を持っていると思ひこんでいるとき、われわれは身体を一種のモノのようなものとして考えている。この世界を満たしているさまざまな物体や物質と同じようなステータスを持ったモノ。「わたし」の自由の力に属するが故に譲渡不能ということになってはいるが、しかし本質的には取り引き可能、交換可能、接触可能な実体のようなモノ。身体は物体のなかのたかだか特殊なひとつにすぎないというわけである。ここには、存在するものはモノだ、という強い思ひ込みがある。だ

が、はたしてわたしの身体は、そのテーブルの上の珈琲茶碗7と同じ資格でモノなのか。珈琲茶碗の存在はそれほど明確で、それだけが存在のモデルを呈示できるのか。そこにもまたもうひとつの転倒があるのではないか。というのも、われわれはひよつとしたら珈琲茶碗や灰皿がどのように存在しているのか知らないのかもしれないからだ。われわれが本来識っているべきなのは、われわれがどのように存在しているかだ。われわれが身体であり、身体として存在しており、それがどういことなのか、ほんとうはわれわれは識っているはずだ。ところが、われわれはいつの間にか、存在しているということを、われわれではない他の物体の存在から出発して了解してしまう。<sup>8</sup> あたかも、われわれの身体が珈琲茶碗や灰皿と同じ存在状態をして

いるかのように錯覚してしまうのだ。

だが、そうではない。ひよつとしたら、われわれは野草や虫鳥は言うに及ばず、星辰せいしんにしても人工物にしても、珈琲茶碗から灰皿に至るまで、むしろわれわれの身体という存在状態から出発して理解するべきなのかもしれないのだ。誰のだから知らない——実はそれが大きな問題ではあるが——、しかしこの珈琲茶碗、この灰皿は、物体というよりはむしろひとつの身体としてそこにある！<sup>9</sup> そういう認識を通じていかなければ、われわれはわれわれの身体がどのように存在しているのかをけつして理解することはできないのではないだろうか。

この世界と相関しているわれわれの存在のあり方とは、物体のそれではない。むしろ身体のそれである。身体の実体がどういふものであるのか分かりさえすれば、われわれはこの世界の秘密を知ることができる。<sup>10</sup> 世界には秘密がないというその最大の秘密をおそらくは正当に知ることができるのだ。

だが、それにしてもどのようにしたら、われわれにこんなにも近い身体の実実を知ることができるのか。身体を身体に戻し、身体をその存在に戻す。そのためには、われわれはただ純粹な注意をわれわれの身体に傾けることしかできないだろうか。呼吸をする、歩行する、食事する、眠る……身体のミニマル・ベーシックに静かで全体的な注意を注ぐ。溢れるほどの限りない注意を注ぐ。魂の祈りであるような注意を注ぐ。そんなふうにして、しばしば乖離かいりしがちなわれわれの心と身体とをゆつたりと一致させるようにする。遠い、しかし激しい雷鳴のように、そもそも心と身体とは別のもものではなかったことを思

い起こさせる。心というこんな激しい酸から身体がゆったりと癒されていかなければならない。自分の存在を肯定しなければならぬのだ。

(小林康夫『こころのアポリア—幸福と死のあいだで』)

〈注〉 フロイト：オーストリアの精神科医、精神分析学者。

ミニマル・ベーシック：ここでは最低限の必要性のこと。

問一 傍線部1はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 事実を事実として語ったからそのまま真実だというわけではないのだが、心からの感動が伴えば真実になりうるという事。
- b 死にしても性にしても霊にしても、とどのつまりは身体という人間にとってただ一つの真実の派生物とは見なしえないということ。
- c 本来、人間の存在様態とは身体でしかありえないのだが、われわれはその事実を容易には受け入れようとはしないとすること。
- d 真実とは何かを知るためには、事実が事実を超え、さらに超え出たものが身体において唯一の確実さとともに生きられなければならないということ。

問二 傍線部2のように著者が述べるのはなぜか。次の中からもっとも適切な理由を一つ選べ。

a われわれ人間は身体として存在していることが明らかであるにもかかわらず、それが自分たちの所有物であるかのよう  
に錯覚してしまうから。

b 身体において、真実が経験され、生きられ、受肉化されないかぎり、その真実が本当の意味での真実と呼べないか  
ら。

c 身体というものがわれわれにとつての唯一の真実なのであり、われわれはその身体としてしか存在しえず、しか  
もその真実を受け入れがたいから。

d 死、性、労働、霊など、これらは明らかに身体的な現象ではあるのだが、同時にそれらについて論じ始めると議論が  
尽きないから。

問三 傍線部3のように著者が問いかける理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 身体というものがわけのわからない不思議な存在だから。

b 身体というものが大きな真実だと信じるに足る理由があるから。

c われわれは身体の拘束を逃れているという幻想が生まれているから。

d われわれが身体であるがゆえに、その存在がかえって隠されてしまうから。

問四 傍線部4のように著者が述べるのはなぜか。その理由としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a われわれは自分自身が身体によって規定されていることは認めつつも、やはりどこかで身体による拘束を逃れ自由だと思ひ込みたいから。

b われわれは自分自身が身体であることは認められるのだが、それだけでなく精神面も重視してしまうから。

c 歯が痛くなり、あるいは加齢によって白髪が増えたとしても、その理由だけで自分自身が別人になったと考えることは理論的にありえないから。

d 身体が大真実であることは容易に受け入れることができるのだが、同時に自分自身が身体であることが隠蔽されているから。

問五 傍線部5は何を意味するのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 身体は存在するものではなく、所有すべきものという誤解が生じること。

b 存在が所有へと転倒してしまい、存在の真実が隠蔽されてしまうこと。

c モノだけでなく、他者の身体までも所有してしまおうと望むこと。

d 〈be〉動詞が〈have〉動詞に転換してしまい、混乱が生じること。

問六 傍線部6はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 男女の違いという存在の論理が、ある生殖器官の有無という所有の論理にすり替わるのは幻想だが、それを現実と見なす文化もあるということ。

b 自分自身が身体という存在であるにもかかわらず、身体を所有している、そして所有し続けなければならないと思ひ込んでしまうこと。

c 存在の論理を所有の論理と置換するときわれわれが身体であるという真実が隠れ、幻想が生じるが、その幻想により真実から目を逸らすことが文化的行為だということ。

d 身体は本質的に取り引き可能、交換可能、接触可能な実体的なモノであると強く思い込んでしまうこと。

問七 傍線部7はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 珈琲茶碗などのモノが存在のモデルになりうると思い込むこと。

b 身体が物体の中の特殊なひとつにすぎないと信じ込むこと。

c われわれが身体を所有してしまうと思ひ込んでしまうこと。

d 珈琲茶碗の存在をそのまま所有の概念に置き換えてしまうこと。



問八 傍線部8はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 珈琲茶碗や灰皿は取り引き可能、交換可能な実体としてのモノなのであるが、われわれの身体も同じような存在のしかたを持つと勘違いすること。

b 珈琲茶碗や灰皿は取り引き可能であり交換可能でもあり、それゆえ値段をつけることができるが、身体もそれと同様だと勘違いすること。

c 珈琲茶碗や灰皿はわれわれの生活にとても近く存在するが、その近さゆえに身体と似たような存在様態を取っていると思ひ込んでしまうこと。

d われわれは身体の存在のしかたもよく理解していないのだが、同様に珈琲茶碗や灰皿の存在様態もよくわかっていると思ひ込んでしまうこと。

問九 傍線部9はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 珈琲茶碗や灰皿は単なるモノでしかないのだが、ひとつの身体として見なせば、隠された身体を暴露することができるという認識。

b 珈琲茶碗や灰皿が単なるモノとしてこの世界に存在すると見なすのではなく、それらをわれわれの身体がとらえたものとして考えなければならないという認識。

c 珈琲茶碗や灰皿が単なるモノとしてこの世界に存在すると見なすのではなく、身体のように背後に文化や歴史を隠し持っているという認識。

d 珈琲茶碗や灰皿がどのように存在しているのかもわれわれは知らないのかもしれないが、とりあえず身体と比較してみることが大切だという認識。

問十 傍線部10はどのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 珈琲茶碗も灰皿も物体というよりは身体として存在するという認識を通れば、われわれの身体の存在のしかたもすべて理解できるということ。

b われわれにあまりにも近い身体の真実を知ることができれば、世界の秘密を知ることになり、もはや秘密は残されていないとわかること。

c 自分の身体に関する真実を理解することができれば、もはや世界に秘密はないも同然であり、残されるのは身体と物体の違いを知ることだけになること。

d 世界中の野草、虫鳥さらに星辰さえも理解しつくされてしまった現在、世界のどこかになお秘密の場所を見つけることはもはやできないということを知ること。

問十一 本文の内容に一致しないものを次の中から一つ選べ。

a われわれは身体そのものであり、それゆえに身体を理解できない。

b われわれは身体を存在としてではなく、所有物のように勘違いしがちである。

c モノを理解するとき大切なのは、それが身体として存在すると認識することである。

d われわれが事実を事実として述べたとき、真実は生まれる。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

ある人咸陽宮の釘かくしなりとて、短剣の鏢に物数奇て腰もはなたずめで興じける。いかにも金銀銅鉄をもて、花鳥を鏤めたる古物にて、千歳のいにしへもゆかしきものなりけらし。されど何を証として、咸宮の釘かくしといへるにや、荒唐のさたなり。なかなかに咸陽宮の釘かくしといはずばめでたきものなるを、無念の事におほゆ。

長柄の橋杭、井出のほしかはづも、今の世の人持ちつたへたらましかば、あさましくおほつかなき事に人申しあさみ侍らめ。常盤潭北が所持したる高麗の茶碗は、義士大高源吾が秘蔵したるものにて、すなはち源吾よりつたへて、また余にゆづりたり。まことに伝来いぢるきものにて侍れど、何を証となすべき。のちのちはかの咸陽の釘かくしの類ひなれば、やがて人にうちくれたり。

松島の天麟院は、瑞巖寺と薨をならべて尊き大禪刹なり。余、その寺に客たりける時、長老、古き板の尺余ばかりなるを、余にあたへて曰く、「仙台の大守中将何がし殿は、さうなき歌よみにておはせし。多くの入夫して、名取河の水底を浚せ、とかくして埋れ木を掘りもとめて料紙硯の箱にもし、それに宮城野の萩の軸つけたる筆を添へて、二条家へまゐらせられたり。これはその板の余りにておぼろげならぬものなり」とてたびぬ。楓の理のごとくあざやかなり。水底に千歳をふりたるものなれば、いろ黒く真がねをのべたるやうに、たたけばくわんくわんと音す。重さ十斤ばかりもあらん、それをひらづつみして、肩にひしと負ひつも、からうじて白石の駅までもち出でたり。長途の勞れたゆべくもあらねば、その夜やどりたる旅舎のすの子の下に押しやりてまうでぬ。そののちほどへて、結城の雁宕がもとにて潭北にかたりければ、潭北はらあしく余を罵りて曰く、「やよ、さばかりの奇物、うちすて置きたるむくつけ法師よ。その物我れ得てん。人やある、ただゆけ」と、須賀川の晋流がもとに告げやりたり。晋流ふみを添へて、その人をしてしへて白石の旅舎を尋ね、「いついつ法師のやどりたるが、しかじかの物遺れおけり。それもとめにまかでぬ」といはせければ、駅亭のあるじ、かしこくさがし得てあたへければ、得てかへりぬ。後雁宕つたへて、魚鶴といへる硯の蓋にしてもてり。結城より白石までは七十里余ありて、ことに日数もへだたりぬる

に、得てかへりたる、<sup>10</sup>けうのことなり。

(蕪村『新花摘』)

〔注〕 咸陽宮：秦の始皇帝が都である咸陽に造営した宮殿。

長柄の橋杭、井出のほしかはづ：長柄の橋は摂津国の歌枕。井出は山城国の井出の玉川のこと、蛙と山吹で有名な歌枕。それらにちなむ橋杭や蛙の干物を、帯刀節信と能因が見せ合ったという故事が『袋草紙』に出ている。

常盤潭北・結城の雁宕・須賀川の晋流：いずれも作者と交わりのあった俳人。なお、結城は、現在の茨城県結城市。須賀川は、福島県須賀川市。

高麗の茶碗：高麗焼の茶碗。茶道において珍重された。

大高源吾：赤穂義士の一人。俳人としても有名であった。

天麟院・瑞巖寺：ともに、宮城県松島の臨濟宗妙心寺派の寺院。

名取河：仙台の南を流れる川。歌枕。

宮城野：仙台市東部の野。歌枕。

二条家：藤原為氏に始まる和歌の家柄のひとつ。

重さ十斤：一斤は約六〇〇グラム。

白石の駅：宮城県白石市。当時は片倉氏の城下。

七十里余：一里は約四キロメートル。

問一 傍線部1「千歳のいにしへもゆかしきものなりけらし」の現代語訳として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 千年以上前の様子を伝える貴重な資料のようだ。
- b 千年以上も前の様子を髣髴<sup>ほうふつ</sup>とさせる品のように思われる。
- c 千年以上持ち伝えてきたすばらしい品である。
- d 千年後にも珍重されるすばらしい品にちがいない。

問二 傍線部2「なかなか咸陽宮の釘かくしといはずばめでたきものなるを」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 無理にでも咸陽宮の釘かくしだということにしなければ、そのすばらしさはわかってもらえないだろうに。
- b 咸陽宮の釘かくしだといさえしなければ、すばらしい工芸品として、珍重できたのに。
- c 無理に咸陽宮の釘かくしだといったばかりに、贖物<sup>がんぶつ</sup>あつかいされることになってしまったなあ。
- d 根拠もなく咸陽宮の釘かくしといったばかりに、みんながすばらしいとほめそやすようになったなあ。

問三 傍線部3「今の世の人持ちつたへたらましかば、あさましくおぼつかなき事に人申しあさみ侍らめ」の現代語訳として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a いまの世に持ち伝えている人がいたら、素姓不明の不審な品として、人々は馬鹿にすることだろう。
- b いまの世に持ち伝えていたならば、あきれはて、不審なこととして、人々はさげすむことだろう。
- c いまの世に持ち伝えていたならば、ばかばかしく、意味のないこととして、人々は馬鹿にすることだろう。
- d いまの世に持ち伝えている人がいたら、みすばらしく、くだらない品として、人々はさげすむだろう。

問四 傍線部4「いちじるき」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a はつきりしている。
- b わかりやすい。
- c 目立ちやすい。
- d 立派な。

問五 なぜ、傍線部5「のちのちはかの咸陽の釘かくしの類ひなれば」のように言うのか。その説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 本物であるという証拠がなくなってしまうから。
- b 偽物だというレッテルを貼られてしまうから。
- c 意味もなく珍重されるようになってしまうから。
- d 本来の品物のよさが忘れられてしまうから。

問六 傍線部6「さうなき」の現代語訳として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a それほどでもない。
- b そばによるひとのない。
- c ならばものない。
- d 身分相応の。

問七 傍線部7「おぼろげならぬものなり」の意味について、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a よくわからないものです。
- b すばらしいものです。
- c いいかげんなものです。
- d 由緒のあるものです。

問八 傍線部8「長途の労れたゆべくもあらねば」の説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 長い時間がかかるのがまんできなくなつて。
- b 長い道のりを運んできて、疲れてしまったので。
- c この先の道のりを運ぶことはできないと思つたので。
- d これ以上長旅を続けることはできないと思つて。

問九 傍線部9「むくつけ法師」と言つた理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a すばらしい品物を自分のものになかつたから。
- b すばらしい品物を粗末に扱つたから。
- c すばらしい品物を捨ててしまつたから。
- d すばらしい品物の価値を認めていないから。

問十 傍線部10「けうのことなり」と評する作者の気持ちの説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a あんな大きなものを、ずいぶん遠くからよくまあ運んできたものだなあ。
- b ずいぶんと時間が経ってしまっていたのに、なくならずによくまあ出てきたものだなあ。
- c 素性のはっきりしないものを、大変な思いをしてよくまあ運んでいったものだなあ。
- d 運べなくなつて宿に置いてきたものを、大切にしてもらつてほんとうにありがたいことだなあ。

問十一 蕪村に関する次の説明のうち、正しいものを次の中から二つ選べ。

- a 「目に青葉山ほととぎす初鰹」の作者である。
- b 「閑さや岩にしみ入る蟬の声」の作者である。
- c 「鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな」の作者である。
- d 日常的な生活感情を平明に表現する独自の様式を開いた。
- e 「仮名書きの詩人」と評され、画においてもすぐれた業績を残した。
- f 西行や宗祇にあこがれ、旅に出ることを好み、多くの紀行文を残した。



三

次の文章を読んで、後の間に答えよ。ただし、設問の関係上、返り点・送り仮名を付していないところがある。また、**〔B〕**の文章が、**〔A〕**の詩についての解説となっていることに注意せよ。

**〔A〕** 折戟沈<sup>ミテ</sup>沙鉄半銷<sup>1</sup> 自将<sup>ラ</sup>磨洗<sup>テ</sup>認<sup>2</sup>前朝

東風<sup>3</sup>不下与<sup>ニ</sup>周郎<sup>一</sup>便上 銅雀春深<sup>クシテ</sup>鎖<sup>4</sup>二喬

(杜牧「赤壁」、『三体詩』所収)

**〔B〕** 吳周瑜<sup>しゅうゆ</sup>伝、年二十四、吳中呼<sup>ビテ</sup>為<sup>ス</sup>二周郎<sup>ト</sup>。孫策攻<sup>メ</sup>皖<sup>カムラ</sup>得<sup>ル</sup>二喬<sup>ニ</sup>玄<sup>ガ</sup>一<sup>ニ</sup>女<sup>ヲ</sup>、皆

国<sup>5</sup>色<sup>タリ</sup>。策<sup>イシ</sup>納<sup>レ</sup>二大喬<sup>ヲ</sup>、瑜<sup>ル</sup>納<sup>ル</sup>二小喬<sup>ヲ</sup>。又瑜与<sup>レ</sup>曹遇<sup>ヒ</sup>二於<sup>ニ</sup>赤壁<sup>ニ</sup>、曹公在<sup>リ</sup>二北岸<sup>ニ</sup>、

瑜在<sup>リ</sup>二南岸<sup>ニ</sup>。瑜<sup>ガ</sup>将<sup>コウ</sup>黄蓋<sup>がい</sup>以<sup>テ</sup>二船<sup>ニ</sup>載<sup>スル</sup>薪<sup>ヲ</sup>烧<sup>ク</sup>二北船<sup>ヲ</sup>。時東南風急<sup>ニシテ</sup>、北船烧

尽<sup>シ</sup>、曹公敗走<sup>ス</sup>。又曹公作<sup>リ</sup>二銅雀台<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>鄴<sup>ギョウ</sup>、置<sup>ク</sup>二妓<sup>ヲ</sup>其上<sup>ニ</sup>。詩意謂<sup>ニ</sup>非<sup>ズ</sup>二東

風助順<sup>スルニチ</sup>、則瑜不能<sup>ハ</sup>勝<sup>ツ</sup>、家必<sup>ズ</sup>為<sup>レ</sup>虜<sup>ト</sup>矣。

(『三体詩』天隠注)

〔C〕孫氏、霸業翳<sup>かげり</sup>此<sup>ノ</sup>一戰<sup>ニ</sup>、社稷<sup>しゃよく</sup>存亡<sup>6</sup>、生靈塗炭、都<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>問<sup>ハ</sup>。只<sup>ダ</sup>恐<sup>レ</sup>捉<sup>ヘ</sup>二<sup>ラルル</sup>。

二喬<sup>ヲ</sup>、可<sup>シ</sup>見<sup>ツ</sup>措大<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>識<sup>ニ</sup>好<sup>シ</sup>惡<sup>ヲ</sup>。

(『二体詩』裴庚増注)

〈注〉○戟―ほこ。 ○吳周瑜伝―『三国志』吳書・周瑜伝。 ○孫策―周瑜の仕えた吳の君主。 ○皖―安徽省の地名。 ○喬  
 玄―後漢の人。 ○曹―魏の曹操。 ○赤壁―湖北省赤壁市あたりの長江岸壁。 同地は、二〇八年に魏と吳・蜀の連合軍  
 とが戦った古戦場。 ○黄蓋―吳の將軍。 ○銅雀台―曹操が鄴(河北省)に作った展望台。 ○助順―道理のあるものを  
 援助する。 ○社稷―国家。 ○措大―知識の足りない書生。

問一 傍線部1「半銷」、2「認前朝」、5「国色」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つずつ選べ。

1 a 半分から折れていた。

b 途中で消えていた。

c 半ばはさびていた。

d 半分は埋もれていた。

2 a 漢の王朝のものであると識別した。

b 一つ前の王朝に属することがわかった。

c かつて訪ねた呉王朝のものだと判明した。

d 進んだ魏王朝の文化であると認知した。

5 a 国随一の美女であった。

b 国を支える母のような女性であった。

c 国中に愛される女性であった。

d 国を傾けるほどの女傑であった。

問二 傍線部3「東風不与周郎便」について、以下の設問に答えよ。

(1) 「東風不与周郎便」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 東風が周郎のもとに吹かない場合には何の得もなく、
- b 東風が周郎に便宜を与えなかったので、
- c 東風が周郎のために有利に働かなければ、
- d 東風は何も与えなかったので周郎はしかたなく、

(2) 「東風」は、実際の戦にどう影響したというのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 季節外れの東風が強く吹いた結果、船に慣れない曹操軍はうろたえて敗走し、その結果、勝利が周郎のもとに転がり込んできた。
- b 呉の黄蓋は薪を山積みにした船で曹操軍に立ち向かったが、風がなく船は容易に進まず難渋した。そこに東風が吹いたので、周郎にとっては幸運であった。
- c 東風の吹く頃、孫策は二喬を手に入れ、そのうち一人を周郎に妻として与えたので、周郎は得がたいものを手に入れたことになった。
- d 赤壁に停泊していた曹操軍の船は、東風によってあおられた火によって、ほとんどが焼け落ちてしまい、周郎の軍の大勝利となった。

問三 傍線部4「鎖二喬」の意味する内容として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 大喬と小喬の姉妹を晩春の銅雀台に捕らえておく。
- b 大喬と小喬の姉妹のいる銅雀台に春がたちこめる。
- c 大喬と小喬の姉妹を銅雀台の奥深くに隠す。
- d 大喬と小喬の姉妹が銅雀台に春をとじこめる。

問四 傍線部6「生靈塗炭」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 人民の平凡な生活。
- b 民衆にとつての大変な苦しみ。
- c 泥や炭という日常にありふれたもの。
- d 生きとし生けるものすべてが必要なもの。

問五 ㉔の要旨として、もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 孫氏の国家はこの一戦によって翳りが生じてしまい、加えて二喬を奪われることを恐れるあまりに正確な判断ができなくなっている。

b 孫氏の国家の命運をまったく問うことなく、二喬を奪われることだけに意を注ぐのは詩として偏っていて、善悪の判断をつけがたい。

c 孫氏の国家は危うい戦によって勝利し、人民も不問に付され、二喬も奪われずに済んだが、詩はその状況を好悪の情に関係なく公正に詠じている。

d 孫氏の国家の存亡はこの一戦にかかっていたのに、詩は二喬を奪われることはかりを危惧する内容となっているので、未熟な書生の作のようだ。

問六 ㉕の詩について述べたものとして、適切なものを次の中から二つ選べ。

a 古戦場に流れた時の経過を、「折戟」を詠ずることで巧みに表現している。

b 詩は、曹操が周郎によって宿願を果たすことができなかつたことに、いささか同情的である。

c 杜牧は実際に吹いた「東風」を偶然のものと思なし、人為の虚しさを寓意的に詠じている。

d すでに晩唐の時期には、曹操を好きな人物と見なす風潮があつたことがうかがい知られる。

e 大喬と小喬という二人の女性を詠ずることで、殺伐としがちな懐古の詩に滑稽味を加えている。

f 杜牧は赤壁の古戦場に足を運ぶことはせず、過去を回想しながら詩を作った。